宮廷魔導士は鎖で繋がれ溺愛される

こいなだ陽日
YOUKA KOINADA

ノーチェ文庫

登場人物紹介

コンドラト

シュタルの同僚。
彼女に想いを寄せているが
まったく伝わっていない。

カーロ

宮廷魔導士の一人。
レッドバーンの優秀さに
嫉妬して、
きつく当たっている。

オズ

宮廷魔導士の筆頭で、
レッドバーンたちの上司。
一見、魔導士というより
騎士風の美丈夫。

ライム

シュタルの同僚。
彼女と仲がよく、
女子らしい話で
盛り上がることも。

ゾディ

他国の筆頭魔導士。
なにかとシュタルのことを
気にかけてくれている
姉御肌の美女。

シュタル

元戦災孤児の宮廷魔導士。
六年前、レッドバーンに見出され
彼の弟子になった。
師匠を誰よりも尊敬しており
一途に尽くしている。

レッドバーン

シュタルの優しい師匠で、
宮廷魔導士の副筆頭。
実力も人格も兼ね備えているが、
若さゆえに妬まれてもいる。
シュタルへの態度は
ちょっと過保護。

目次

宮廷魔導士は鎖で繋がれ溺愛される　7
後日談「練習」　331
書き下ろし番外編
その書物にこめられた思い　347

宮廷魔導士は鎖で繋がれ溺愛される

プロローグ

――赤い色は嫌いだ。なぜなら、両親が流した血と、村を焼いた炎を連想させるから。

シュタルは十三歳で戦争孤児となった。

本来ならば日の光にきらめく銀色の髪は土埃で汚れ、輝きを失っている。藍色の瞳は暗くよどみ、どこかうつろだ。戦争中は食べ物も満足に得られなかったので、体は痩せ細り、腕など簡単に折れてしまいそうなほどだった。

戦争が終わり、シュタルは身の振りかたを決める必要に迫られていた。自分の村を焼かれてしまったので、まずは住む場所を見つけなければならない。

戦争孤児は孤児院で受け入れてもらえるはずなのだが、十三歳となると、孤児院に入れるかどうかギリギリの歳である。

父は死んだ。母も死んだ。祖父母も優しかった近所のおばさんも、目の前で殺されてしまった。

敵兵にも温情があったのか、シュタルはまだ子供だからと見逃してもらえた。身長が低かったため、実際の歳より幼く見えたのかもしれない。

しかし、これから先のことを考えると、いっそ殺してもらったほうが楽だったと思う。

今は戦争難民の受け入れ施設に身を寄せているが、いつまでもここにいるわけにはいかない。

孤児院に入れなかったら、これから先はどうやって生きていったらいいのだろうか？　十三歳の少女を住みこみで雇ってくれるところなど、あるのだろうか？

シュタルはそんなことを考えながら、薄汚れた施設の中で、同じように助かった村の子供たちと身を寄せあっていた。すると突然、身なりのよい若い男が部屋に入ってくる。

軍服とは少し違ったデザインの服を着ているが、胸元にしっかりと国の紋章が刺繍されているので、怪しい人ではなさそうだ。役人なのかもしれない。

肩より少し上で切り揃えた黒い髪は、彼が歩くたびにサラサラと揺れた。肩幅は広く、がっしりとした立派な体躯をしている。歳は二十歳くらいだろうか？　鼻梁が高く、顔立ちが整っていた。

彼はどこからどう見ても男の人だったけれど、とても美しい。村にはこんなに綺麗な男の人はいなかったので、彼を見た瞬間、シュタルは心臓が跳ね上がったのかと思うく

らいどきりとした。それは他の女の子も同じようで、部屋の中にいた娘たちはみんな彼に見惚れている。

そんな中、彼が子供たちに呼びかけた。

「お前たち、ここに横一列に並んでくれないか？」

低く、澄んだ声だ。顔の綺麗な人は声まで綺麗なのか、とシュタルは思う。

部屋の中にいた子供たちは、突然現れた大人の命令に戸惑いつつも、言われたとおりに並んだ。

人探しでもしているのか、彼は並べた子供たちの顔を一人ずつ覗きこんでいく。

シュタルが並んだ場所は、列の最後だった。彼が近づいてくるにつれて、胸がどきどきする。早く自分の番になってほしいような、そうでないような、不思議な気持ちだ。

そして、とうとうシュタルの番になった。彼はシュタルの顔を覗きこみ、整った眉をひそめる。何か粗相をしてしまったのかとシュタルが不安げな表情を浮かべると、彼は言った。

「珍しい。女なのに魔力がある」

「魔力……？」

訳が分からず、シュタルは小首を傾げる。

「魔術を使える力のことだ。生まれつき魔力を持っている者だけが魔導士になれる。俺は、ここに魔力を持っている子供がいないか探しに来た」

「魔導士……」

シュタルが生まれ育った国境付近の小さな村には、魔導士は存在しなかった。だが、王都には魔導士が沢山いて、今回の戦争でもかなり活躍したと噂されている。

「お前には魔力がある。そして女が魔力を持っているのは、とても珍しい。俺はこのブルーク国の宮廷魔導士だ。お前が望むのなら、俺の弟子として面倒を見てやる」

そう言うと、彼はシュタルに手を差し伸べる。男らしい、大きな手だ。

「俺はレッドバーンだ。魔導士になるか？」

レッドバーンと名乗った彼は、シュタルの瞳をじっと見る。その瞳の色は――燃えるような深紅。

赤は嫌いな色のはずなのに、なぜか彼の瞳の色は嫌ではない。彼が、とても優しい眼差しでシュタルを見つめているからだろうか。

その赤い色に魅了されたように、シュタルは小さな手を彼に伸ばす。

「よろしくお願いします、レッドバーン様」

これからどうやって生きていったらいいのか、分からなかった。そんな自分の前に差

し出された彼の手は、唯一無二の救いに思える。
レッドバーンはシュタルの手をぎゅっと握ると、優しく声をかけてくれた。
「魔導士の弟子は、自分の師匠のことを兄と呼ぶのが習わしだ。俺のことも名前ではなく、兄さんとか兄上とか、そういう風に呼んでくれ」
「えっ……。では、兄様……？」
初対面の男を兄と呼ぶことに戸惑いながらもシュタルがそう言うと、レッドバーンはにこりと微笑む。シュタルには兄がいなかったものの、新しい兄が——家族ができたような錯覚におちいる。
「兄様」
もう一度呼んでみると、レッドバーンは「ああ」と頷いた。
血は繋がっていないけれど、兄と呼べる存在が、そして兄という呼びかけに応えてくれる存在ができたことに、からっぽになっていた胸のうちがぽかぽかと温かくなってくる。

シュタルは自分を見つめる深紅の瞳を見た。
家族が流した血の赤。村を焼いた炎の赤。

シュタルからすべてを奪ったはずの赤い色が、自分に生きる場所を与えてくれる色となった。
——赤い色はもう、嫌ではなかった。

第一章　師弟

宮廷魔導士たちの朝は早い。

シュタルは空がまだ藍色のうちから起きて、手早く身支度を済ませる。身だしなみを確認するために姿見の前に立つと、そこには宮廷魔導士の制服を着た自分の姿が映っていた。

腰まで伸びた銀の髪はきっちりと束ねられ、今の空と同じ深い藍色の瞳はぱっちりと開かれている。これなら王族の前に出ても大丈夫だと、シュタルは軽く頷いた。

自身の姿を確認した彼女は、扉続きの隣室へと入っていく。隣室はシュタルの師匠の部屋だ。

ちょっとした図書館さながら、壁に沿ってずらりと書架が並んでいるけれど、それでも入りきらない本が床に積まれていた。シュタルはその本の山を蹴らないように気をつけつつ、ベッドまで近づく。

大きなベッドの上で、シュタルの師匠は寝息を立てていた。その端整な寝顔に見惚れ

そうになりながらも、シュタルは彼の肩をぽんぽんと軽く叩く。

「兄様、起きてください。朝です」

「ん……」

身を起こしたのは、六年ほど前に戦争孤児だったシュタルを弟子にしてくれたレッドバーンだ。

彼は宮廷魔導士の中でも二番目の権力を持つ、副筆頭魔導士の役職に就いている。ただし、寝起きの今は寝癖が酷く、その姿に威厳はない。

シュタルは彼の身支度を手伝い、鏡台の前に座らせた。寝癖だらけの髪に、油に浸していた櫛を通す。ぐちゃぐちゃだった漆黒の髪はものの数十秒でまっすぐになった。

レッドバーンは深紅の目を細めて、「ご苦労」と呟く。

「では行くか」

「はい」

シュタルはレッドバーンの後ろについて部屋を出る。

宮廷魔導士が住む寮は、魔導士たちの仕事場でもある魔導士棟の一角に作られていた。寮の区域を抜け、仕事場についたところ、朝一番の仕事のために多くの魔導士たちが慌ただしそうに動き回っている。彼らはレッドバーンの姿を見ると、足を止めて頭を下げた。

「おはようございます、レッドバーン様」
「おはよう。忙しいのは分かってるから、いちいち立ち止まって頭を下げなくてもいいぞ」
副筆頭魔導士という立場でありながら、自分の権力を鼻にかけないレッドバーンはそう返事をする。しかし、そんな彼を責めるような言葉が投げかけられた。
「そういうわけにもいきますまい」
シュタルとレッドバーンは一瞬だけ目をあわせたあと、声のほうを向く。
そこには齢五十ほどの男が立っていた。ずいぶんと恰幅がよく、宮廷魔導士の制服はお腹の部分がぽっこりと膨らんでいる。
「おはようございます、カーロ殿」
「おはようございます、カーロ様」
レッドバーンとシュタルは、口を揃えて挨拶をした。
カーロは宮廷魔導士の風紀長だ。彼自身の魔力は強くないのだが、長年の勤務と、彼の兄弟が高位の文官であることを考慮され、数年前に新設された風紀長の役職に就いている。……とはいっても、彼のために用意された名ばかりの役職で、職務内容は魔導士たちが規律を乱さないよう指導したり、設備の維持管理をしたりと、魔力が弱くてもできるものだった。

副筆頭魔導士のレッドバーンのほうが立場は上であるけれど、カーロのほうが年上で職歴も長い。だからレッドバーンは彼の顔を立てて、下手に出ていた。

「挨拶もまともにできないようでは、風紀が乱れる。副筆頭魔導士であるのに、そんなことも分からないのですか？」

嫌みたらしい口調でカーロが言う。

「申し訳ございません」

「第一、あなたは――」

カーロが眉間の皺に指を当てた。それは彼が長い説教を始めるときの癖である。カーロが次の言葉を紡ぐ前に、レッドバーンがすかさず口を挟んだ。

「カーロ殿。王のもとに向かわねばなりませんので、失礼します」

「ああ、そうですか。せいぜいあなたの副筆頭魔導士の地位が奪われないように、王様のご機嫌伺いでもしてきてくださいよ」

ふんと鼻息を荒くしたカーロの脇を、シュタルとレッドバーンは足早に通り過ぎる。声が届かない距離まで離れると、シュタルは小さくため息をついた。

「朝からついてませんね」

「そうだな……」

二人で顔をあわせて苦笑する。

何かあるたびにレッドバーンに嫌みを言うカーロのことが、シュタルは苦手だった。自分の師匠が悪く言われると、自分が悪く言われるよりも嫌な気持ちになる。そして、彼がレッドバーンに嫌みを言う理由も分かりきっていた。

「筆頭魔導士とか副筆頭魔導士になりたかったのなら、どうしてもっと努力しないんでしょうか？」

宮廷魔導士の世界は、完全実力主義だ。レッドバーンは二十六歳という若さでありながら、その強い魔力により副筆頭魔導士という地位に就いている。ちなみに、現筆頭魔導士も、三十一歳という若さだ。

カーロは自分より若い者が上司であることが気に入らないのだろうけれど、ならばもっと努力すればいいだけのことだとシュタルは思っている。

「あの人も、ああ見えてかなり努力をしている。ただ、それに結果が伴わないから苛ついているだけだ。シュタルだってあんなに修業しているのに、魔力が強くならないだろう？」

「そうですけど、それは私の努力が至らないせいです。修業の成果がでないからといっても、魔力の強い人を恨んだりはしません」

副筆頭魔導士の弟子でありながら、いくら修業してもシュタルの魔力は弱いままだった。それもあって努力が実らない辛さは分かるけれど、だからといって人にあたってもいいという免罪符になるとは思わない。

「まあ、シュタルの場合、魔力の弱さを頭で補えるのはすごいことだ」

レッドバーンはそう言うと、シュタルの頭をぽんと撫でる。

「強い魔術が必要になるような場面で、弱い魔術での代案を考えつくだろう？　きちんと魔術の勉強をしているおかげで機転が利くわけだ。そこは誇っていい」

「……ありがとうございます！」

レッドバーンに褒められて、シュタルの顔がにやける。

そうこうしているうちに、二人は王宮まで辿り着いた。

魔導士棟から王宮までは、歩いて五分ほどの距離である。建物を繋ぐ道には屋根がついているので、雨の日でも傘を差す必要はない。

藍色だった空は白ばみ始めていた。

魔導士棟の道から繋がっている西門の前で、レッドバーンの姿を見た衛兵が敬礼をする。軽く挨拶を交わしたあと、レッドバーンたちは王族の部屋がある階へと向かった。王族の部屋とあって、辿り着くまでに沢山の衛兵に会うけれど、皆、顔を見るなり用件

を聞かずに通してくれる。

宝石が埋めこまれたひときわ豪奢な扉の前で待つこと数分、ようやく扉が開かれた。中では王と王妃が待ち構えている。

「おはようございます」

この国で一番偉い人物を前にして、レッドバーンたちは最敬礼をとる。

「おはよう。今日もよろしく頼む」

王の言葉を受けて部屋に入ると、レッドバーンは祝福の呪文を唱え始めた。王族の繁栄を願う祝福の儀から、王の一日は始まるのだ。

レッドバーンの補佐をするのがシュタルの役目である。古くからの伝統に則ったこの儀式には、手鏡やら水晶やら沢山の道具を用いるので、滞りなく進められるようにレッドバーンに道具を渡すのだ。

祝福の儀を終えると、レッドバーンたちは速やかに魔導士棟に帰り、食堂で朝食をとる。

その頃には空はすっかり明るくなっていた。

朝食後、二人は魔導士棟の第一資料室へと向かった。

資料室といえど名ばかりで、実際に資料が置いてあるわけではない。部屋の中には、

遺跡や採石場から発掘された古物が沢山並べられていた。
これら古物が呪われているかどうかを調べる古物鑑定が、午前中の仕事である。
この世界において、呪いは自然現象の一部だ。あたりまえに存在し、人間が風邪を引くのと同様に、物がいつのまにか呪われることがある。
呪いには様々な種類があった。軽い呪いなら人間への影響はないが、強く呪われた物は人間に病をもたらしたり、精神を乱したりと悪影響を与え、最悪の場合は死に至らしめる。
特に遺跡で発掘されるような古物は、人目に触れないまま長い時間を経ることで、呪いが強力になっている場合もある。万が一、強く呪われた古物が博物館で展示されれば、あっという間に疫病が広がり、最悪の場合は国が滅びてしまうだろう。
しかし、普通の人間にはその物が呪われているかどうか判断できない。だからこそ、こうして優秀な宮廷魔導士たちが古物鑑定を行っているのだ。
古物鑑定は地味ながらも重要な仕事であり、強い呪いの解呪は難しいので、高位の魔導士の立ち会いが必要となる。今日の立ち会いは副筆頭魔導士であるレッドバーンで、弟子のシュタルを含めた数名が古物鑑定を行っていた。
シュタルが並べられた古物のひとつを手に取ると、肌が粟立つ。

「兄様。そんなに強くはないみたいですが、これが呪われています」
シュタルはその古物をレッドバーンに差し出した。受け取ったレッドバーンが解呪の呪文を唱えると、古物が淡い光を放つ。彼の周囲にきらきらと光の粒子が舞い、雪のように消えていった。
「解呪したぞ」
レッドバーンは古物をシュタルに返した。触っても、もう嫌な感じはしない。
このように、軽い呪いの解呪は簡単だった。
しかし、シュタルは理由があって、解呪の術を使うことができない。呪いがかかっているものを見つけても、解呪はレッドバーンに任せていた。
シュタルは解呪が済んだ古物を取り分けると、未鑑定の古物を検めていく。
古物鑑定に勤しんでいると資料室の扉がノックされ、魔導士が入ってきた。
「レッドバーン様。今日の三時から王宮の会議室で、合同軍議に関する会議があるそうです」
「ああ、分かった。ご苦労」
レッドバーンが返事をすると、伝令係の魔導士が帰っていく。すると、先月宮廷魔導士になったばかりの新人が興味深そうに訊ねた。

「レッドバーン様、合同軍議ってなんですか？　最近よく聞くんですけど、僕、分からなくて……」
「ああ、お前は王都の外から来たんだったな。じゃあ、合同軍議を知らなくて当然か」
面倒見のいいレッドバーンは、新人に説明を始める。
「六年前に戦争があっただろう？」
「はい。帝国軍が攻めてきましたよね」
新人が頷く。そう、六年前にこのブルーク国の北に位置する帝国が、領土拡大のために攻めこんできて、大きな戦争が起こったのだ。
「そうだ。そのとき、隣国のホワイタル国が援軍を出してくれたおかげで帝国軍を追い返すことができたが、帝国軍がいつまた攻めこんでくるか分からない。だから帝国との国境付近は、俺たちブルーク国と、隣のホワイタル国が連合で騎士と魔導士を置いて警備している」
そう言いながら、レッドバーンがちらりとシュタルを見る。彼の意図を汲み取り、シュタルが続きを説明することにした。おそらく彼は、シュタルが合同軍議のことを新人に説明できるほど理解しているのかどうか、確かめるつもりなのだろう。
「その両国連合の兵の配置について見直したり、帝国軍が攻めてきたらどういう布陣を

とるかを話したりするため、年に一度、ホワイタル国の人を招いて一週間ほど会議をするの。それを合同軍議って言うんだよ」
その説明に、レッドバーンは満足したように頷く。
「二国が合同で大がかりな軍議を開くことは、帝国への牽制にもなる。ホワイタル国から軍隊がやってくるし、向こうの国の筆頭魔導士も来るぞ」
「へえ……。ホワイタル国の筆頭魔導士って、どういうかたなんですか？」
新人が興味深そうに聞くと、その場にいた魔導士たちは顔を見あわせた。
「俺より少し年上の女性だ。ちなみにこの国とは違って、ホワイタル国の魔導士は女性ばかりだぞ」
レッドバーンの答えに、新人は驚いて目を瞠る。
「筆頭魔導士が女の人なんですか？　魔力を生まれ持つ女の人は少ないって聞いたことがあるんですが、魔導士が女性ばかりの国っていうのもすごいですね。うちとは逆だ」
彼の言うとおり、ブルーク国の宮廷魔導士はほとんどが男である。女はシュタルを含めて一割にも満たない。
「つまり、今回の合同軍議では女性魔導士が沢山来るわけだ。彼女たちはみんな、この魔導士棟に宿泊する。ちなみに合同軍議が終わると、魔力が弱まって宮廷魔導士を辞め

る者が毎年必ずいるから、お前も気をつけろよ」
そのレッドバーンの言葉に、資料室の中にいた男の魔導士たちはにやにやと笑った。
だが、シュタルはどうして毎年そんなことが起こるのか、まったくもって分からない。シュタル以外は全員――合同軍議のことを知らなかった新人でさえも意味が分かるようで、彼も「あっ、そういうことですか」と呟いている。
「前々から気になっていたんですが、何が理由でそうなるんですか？」
シュタルは訊ねてみた。
魔導士の持つ魔力は有限なのか、ある日突然、魔力を失い宮廷魔導士を辞職する者が、年間を通してそれなりにいる。しかも、なぜか合同軍議の時期に集中して現れるのだ。
シュタルは気になって仕方ないけれど、その場にいる魔導士たちはシュタルの問いには答えず、全員がレッドバーンを見る。教えてよいのかどうか、迷っている様子だ。
「兄様、勉強のために教えて頂けませんか？　軍議期間以外でいきなり魔力が弱まって辞職する人は三十歳より上の人が多いですけど、軍議期間に魔力が弱まるのは、二十代の若い男の人ばかりですよね？　それも気になっていて……」
シュタルは期待に満ちた眼差しを向けるが、レッドバーンは首を横に振った。
「その件については、今回の合同軍議が終わって落ち着いたら説明しよう。お前の魔力

が弱まることはないから、心配するな」
やはり今回も教えてもらえなかったが、合同軍議が終わったら説明するとの言葉に、シュタルはぱっと表情を輝かせる。
レッドバーンは誠実な男で、めったなことでは嘘をつかないのだ。
「本当ですか？　本当に、教えてくれます？」
「ああ、本当だ」
ようやく長年の疑問が解けると思うと、とても嬉しくなる。
シュタルはご機嫌になりつつ、古物の鑑定を続けた。

昼食のあと、三時までは休憩の時間だ。宮廷魔導士たちは朝が早いので、この時間に休憩として昼寝をするのが習慣になっている。
レッドバーンは部屋に戻ると制服を脱いで下着姿になり、ベッドに横になった。シュタルは彼の制服をしっかり畳んでから、自らも下着姿になって同じベッドに入る。
彼はシュタルの体を抱きしめながら、午前中の仕事で唱えたものとまったく同じ解呪の呪文を唱えた。
すると、シュタルの体がほんのりと温かくなっていく。レッドバーンの逞しい腕に抱

かれたシュタルは、気持ちよさそうに目を細めた。
「気持ちいい……」
嫌なものが体から抜けていく感触に、シュタルがぽつりとこぼす。
「兄様。私の呪い、なくなりましたか？」
答えは分かりきっているものの、毎日聞かずにはいられない。
「……まだだな」
シュタルを優しく抱きしめたまま、いつもと同じようにレッドバーンは答えた。
条件が揃うと、物だけではなく人間も呪われてしまう。実は、シュタルも呪われているのだ。
六年前の帝国軍との戦争で、国境付近にあったシュタルの村は真っ先に焼かれ、シュタルは自分の親や村人など、沢山の人が死ぬのを目の当たりにした。
多くの非業の死を目にすると、呪いがかかることがある。しかも若ければ若いほど呪われる確率が高くなるのだ。当時十三歳だったシュタルは見事に呪われてしまった。
「私も早く、自分で解呪の作業がしたいです」
もどかしそうに、シュタルが呟く。
呪われている人間は、解呪の呪文を使うことができない。だからシュタルは古物鑑定

で呪いを見つけても、解呪はレッドバーンにお願いしていたのだ。
「ああ、早くその日がくるといいな」
レッドバーンは優しく言う。薄い肌着越しに彼のぬくもりを感じて、シュタルはどきどきしながら目を閉じた。
人間は呪われても、すぐに死ぬわけではない。放置しておけば体調を崩し、やがては命を落とすが、解呪の方法もあるのだ。ただ、そのためには大がかりな儀式が必要とされていた。それは体への負担も大きく、後遺症が残る可能性もある。
しかし、強い魔力を持つレッドバーンは、肌を密着させて解呪の呪文を唱えることで、人間の体から呪いを少しずつ追い出すことができた。
だから彼は、シュタルの体に大きな負担をかけて一気に解呪するのではなく、毎日少しずつ解呪する方法を選択した。そのおかげで、シュタルは呪われていても普通に生活できている。
とはいえ、シュタルはもうすぐ十九歳だ。そんないい歳をした自分が、解呪のためとはいえ恋人ではない男と下着姿で抱きあうなんて、ふしだらなように思えてしまう。
けれど、こうして抱きしめられると、安心する自分もいた。親がいない今、シュタルを無条件で抱きしめてくれるのはレッドバーンだけである。伝わってくる彼のぬくもり

は、六年前からずっと変わらない。シュタルはふと昔のことを思い出した。
初めてレッドバーンを見たあの日、美しい彼に見惚(みと)れた。憧れは、彼の弟子として毎日一緒に過ごすうちに、いつしか恋情に変わった。それを恋だと自覚したのは、二年くらい前のことだろうか？
けれど、この胸のうちを気付かれるわけにはいかない。
レッドバーンは潔癖(けっぺき)な男だ。シュタルが彼の弟子になってからというもの、浮いた噂(うわさ)ひとつ聞いたことがない。
端整な顔立ちをしているので宮廷の女官に人気があるが、どんな美女に告白をされてもいつも冷たい態度で断っていた。弟子であり、行動をともにする機会が多いシュタルは、彼が女性を振っている光景を何度も見たことがある。
そんな彼に恋心を抱いていると知られれば、下着姿で抱きあう必要がある解呪なんてやめてしまうかもしれない。彼と触れあう時間がなくなることは耐えがたかった。
だからシュタルは、この思いに蓋をする。
赤い顔がばれないように、彼の胸板に顔を埋(うず)めた。とくんとくんと、心臓の穏やかな音が聞こえる。シュタルはその音が大好きだった。心地よい音を聞きながら、いつしか眠りに落ちていく。

それはシュタルにとって、一日の中で一番幸福な時間であり、辛い時間でもあった。
朝はシュタルがレッドバーンを起こすが、休憩のときは逆になる。
「シュタル、そろそろ起きろ」
レッドバーンに肩を揺すられて目を覚ますと、午後の仕事が始まる十五分前だった。
「俺は会議があるから、王宮に行ってくる。お前は俺の執務室(しつむしつ)で書類の整理をしておいてくれ。多分、いろいろ届いているはずだ」
「はい」
レッドバーンは言い終えてすぐ、素早く着替えて部屋を出ていく。シュタルものろのろと起きて身支度を済ませ、言われたとおりに魔導士棟の中にある彼の執務室(しつむしつ)へと向かった。
その道すがら、シュタルは会いたくない人物と鉢あわせしてしまう。
「カーロ様……」
朝といい今といい、今日はよくカーロに会う日だ。会釈(えしゃく)をしつつ脇を通り過ぎようとすると、彼に呼び止められる。
「シュタル、待ちなさい」

「……」

シュタルは嫌々ながらも、ぴたりと足を止めた。そんなシュタルの姿を、カーロは頭からつま先までなめ回すように見る。彼の蛇に似た視線はなんとも気持ちが悪い。

「ふむ。午後の仕事が始まるまで、まだ時間があるな」

シュタルの肩に手を回し、カーロが語りかけてきた。

風紀長という名ばかりの役職であっても、彼はシュタルより上の立場だ。邪険にはできない。

肩を撫でられて、全身が怖気立つ。レッドバーンがいたら止めてくれるのだろうが、カーロはレッドバーンがいないときに限って絡んでくるのだ。

「ちゃんと勉強はしているのか？」

「はい、きちんと励んでおります」

シュタルは無機質な声で答えた。

「そうか、ならばよい」

にやにやと薄汚い笑みを浮かべたままのカーロは、肩から手を離してくれそうもない。

「あの、カーロ様。私、急いでおりますので」

「少し話をしようではないか。軍議の時にはホワイタルの女性魔導士たちが来るだろう？　彼女たちによりよい環境を提供するために、風紀長として女性魔導士の意見を聞きたいと思っている。これも重要な仕事だ」

「し、仕事ですか……」

仕事と言われると、断りにくい。そもそも意見を出すのはよいけれど、こうして体に触れられることは不快である。とはいえ、カーロはとても気難しいので、無理に手を払って機嫌を損ねたら、あとで師匠であるレッドバーンが嫌みを言われてしまう。

レッドバーンは会議中なので、絶対にここには来ない。自分でなんとかするしかないのだが――さあ、どうやってこの場を切り抜けようかと考えたとき、「カーロ様！」と大きな声がした。

振り向くと、シュタルの同期であるコンドラトがこちらにやってくるところだった。亜麻色の髪を真ん中で分けた彼は、人懐こい笑みを浮かべている。

「どうした、コンドラト」

シュタルの肩から手を離しながら、カーロは眉間に皺を寄せる。シュタルはほっとして、そそくさとカーロから離れた。

「とてもいいものが手に入りまして、カーロ様にもお渡ししたいなあ、と」

「ほう」

カーロはにやりと口角を上げる。コンドラトは人あたりがよく、気難しいカーロとも上手に付きあえる貴重な男だ。

彼はカーロと小声でひそひそと話しつつ、後ろ手を軽く振り、シュタルに「行け」と合図をする。シュタルは心の中でお礼を言いながらレッドバーンの執務室へ行き、仕事をこなしたのだった。

一日の仕事を終え、食堂で夕食をとったあと、シュタルは湯浴みを済ませた。

女性の宮廷魔導士は少なく、入浴時間もバラバラなので、広い浴場はほぼ毎日独り占め状態である。しかし来月はホワイタルの宮廷魔導士が来るので、この浴場も賑やかになるだろう。

浴場を出ると、同じタイミングで入浴を済ませたレッドバーンに会った。二人の部屋は隣同士なので、一緒に部屋まで戻る。

「いよいよ来月だな」

「ええ、そうですね。軍議中は忙しいですが、ホワイタル国の皆さんに会えるのが楽しみです！」

「いや、軍議もあるけど、お前の誕生日の話だ。合同軍議期間の真っ最中に十九になるだろう？」

「あっ」

忙しくて自分の誕生日をすっかり忘れていたシュタルは、レッドバーンが覚えていたことに驚く。彼のほうが軍議の準備で忙しいはずなのに、きちんと覚えていてくれたことが嬉しくて、胸がぽかぽかと温かくなった。

「ついにシュタルも十九歳か。お前の村では十九になると成人として認められたんだったな？」

「はい！」

シュタルはこくこくと頷く。

そんなことまで覚えていてくれたなんてと、さらに心が弾んだ。

昔、レッドバーンへ村の話をしたついでに、村での成人年齢についても口にしたことがあった。

ここブルーク国では十六で成人と認められるのだが、シュタルの村では十九にならないと一人前として認めてもらえず、婚前の妊娠などの特例を除いては結婚もできないのだ。

「軍議期間中は忙しいが、終わったら連休がもらえる。そしたら祝ってやるから」

「ありがとうございます！」
「何か欲しい物はあるか？」
「えっ……、えーと……すみません、特に思い浮かびません」
魔力を上手に使えるようになりたいとは思っているけれど、特に欲しい物などは思い浮かばない。シュタルにしてみれば、村がなくなったのにこうして成人を祝ってくれる人がいるだけで充分だった。
「じゃあ、適当に用意しとくな」
「はい」
会話をしているうちに、部屋に着く。
「おやすみ、シュタル」
「おやすみなさい、兄様」
兄に対して持つはずがない感情を抱きながらも、シュタルはレッドバーンのことを兄様と呼んだ。
レッドバーンは本当の兄のようにシュタルのことを大切にしてくれる。ほのかな恋情を抱いている身としては複雑なものの、彼の厚意は素直に嬉しい。
部屋に入ったシュタルは、鏡台の前に腰を下ろす。鏡台の引き出しを開くと、そこに

は今までレッドバーンからもらった誕生日のプレゼントが大切にしまわれていた。
シュタルの瞳と同じ藍色（あいいろ）をした髪飾り、花をモチーフとした大人っぽいブローチ、大きな銀の輪のイヤリング、色鮮（あざ）やかなブレスレット、そして美しい細工が施（ほどこ）されたネックレス。
すべて年頃の女性が喜びそうなものだ。普段は宮廷魔導士の制服に身を包んで装飾品は身につけないシュタルだけれど、レッドバーンはそれにもかかわらず装飾品を贈ってくれる。そのたびにちゃんと女性として扱ってもらえている気がして、胸が温かくなるのだった。
今年は何をくれるのだろうかと楽しみに思いながら、シュタルはそっと引き出しを閉じた。

◆◆◆◆◆

合同軍議まで、あと二週間に差し迫った日の朝。
「今日は薬草を採りに行く。準備しろ」
レッドバーンがパンを食べながら言った。

「いきなりですね？」
突然の提案に驚いて、シュタルはスプーンを落としそうになる。
「手の空いてる奴らに薬草採取を頼んでおいたのが届いたんだが、使えないものばかりでな。自分で採りに行ったほうが確実だ。軍議の準備もあるし、一日時間をかけられるのは今日しかない。だから、行くぞ」
魔術には薬草を使う分野もあるけれど、どんな薬草でもいいわけではない。上質な薬草を選ばなければならず、それを見極めることは難しいのだ。
「魔導士にとって薬草学も大事なのに、最近の若い奴らは薬草学に見向きもしない。地味だと感じるのは分かるが、大事なことだぞ」
ため息まじりにレッドバーンが口にした言葉は、シュタルの耳にも痛かった。
「うっ……私も精進します」
実は、シュタルは薬草学が苦手だった。
それというのも、この国は作物がよく育つが、国境付近にあったシュタルの村はそこまで土壌が豊かではなく、決まった植物しか育てることができなかったのだ。村に生えるのはごく一部の草花ばかりで、それらがシュタルにとっての植物のすべてだった。
だからシュタルは、王都に来て「こんなに沢山の植物があるなんて」と驚いた。花屋

を見ても、知っている花のほうが少ない。シュタルにしてみれば、王都で初めて出会った薬草はどれも同じに見えてしまう。
そのせいで、魔術に用いられる薬草の名前と効能は暗記しているものの、実物の判別は不得意だった。
「お前は情報だけは頭にあるが、実際の知識が全然足りていないだろう？　だから、沢山実物を見て覚えるしかない」
「はい、頑張ります」
副筆頭魔導士とあって、レッドバーンは魔力が強いだけではなく、知識量も膨大である。部屋を埋め尽くさんばかりの大量の本にはすべて目を通しているし、入りきらない本を置くためだけに、わざわざ外に倉庫を借りているほどだ。魔導士用の魔導図書館にすらない禁書さえ持っているという噂もある。
そんなレッドバーンの弟子として、もっと精進しなければと、シュタルは思った。シュタルも一生懸命に勉強をしているけれど、経験が足りていない。
薬草だってレッドバーンが一人で採りに行ったほうが早いのに、わざわざシュタルを連れていくのは教育のためだ。忙しい時期なのに弟子のことまで考えてくれる彼が師匠だったことは、幸運である。

朝食後、シュタルは遠出の準備をした。食堂のおばさんに声をかけて、弁当を用意してもらう。

他にも籠や麻袋を準備して寮の外に出ると、レッドバーンが厩舎から葦毛の馬を連れてきていた。彼の愛馬だ。宮廷魔導士は、役職につくと馬を下賜され、王宮の厩舎に馬を預けることができる。

この葦毛の馬はレッドバーンの二代目の馬だった。宮廷魔導士には、扱いやすい茶色の馬か、気性は荒いが足が強い黒馬、そして魔力に敏感な白馬などが人気である。しかし、レッドバーンはそのどれでもない葦毛の馬を選んだ。

博識な彼のことだから、葦毛の馬が何か優れた能力を持っているのかと聞いてみたところ、「お前の髪の色に似てるから選んだだけだ」と言われて、胸の奥がくすぐったい気分になったことを、シュタルは今でもよく覚えている。

二人は葦毛の馬に乗り、王都の外れにある森へと向かった。

シュタルは馬に乗れないため、馬で移動するときはレッドバーンの前に乗せてもらう。おかげで、自分の背中とレッドバーンの逞しい胸板が密着して、どきりとした。

戦争が始まれば魔導士も戦地にかり立てられるので、彼は体を鍛えている。魔導士に筋肉は必要ないと言って全然運動をしない者もいるが、六年前の戦争ではそういう奴から死んでいったと、レッドバーンはよく言っていた。

レッドバーンは手綱を操るために両手を前方に出しており、まるでシュタルを抱きしめているような体勢である。毎日の解呪のときも抱きあっているけれど、乗馬の際はまた別なときめきを感じるのだった。

森に着くと、湖で馬に水を飲ませてから薬草を採取する。田舎育ちのおかげか、シュタルは薬草の判別は苦手なものの、植物が上質かどうかを見極めるのは得意だった。

「兄様、これはどうですか？」

むやみに薬草を抜くわけにはいかないので、レッドバーンを呼んで聞いてみる。

「よく見つけたな、これはいい。ちなみに、隣にも草が生えているだろう？　これも薬草で、名前は――」

彼はシュタルに薬草の名前を教えながら採取した。

お昼の時間には、二人で持ってきたお弁当を食べる。そのあとは三時まで休憩の時間であり、それは外に出ても変わらない。

この薬草の採取場所は、レッドバーンが見つけた秘密の場所だった。馬に水を飲ませるのにちょうどよい小さな湖もあるし、湖のおかげで周囲に沢山の薬草が生えている。

この場所に辿り着くには複雑な道を進まねばならないせいか、いつ来てもレッドバーン以外の人物が訪れた形跡はなかった。もしかしたら、彼がこっそり人避けの結界を張っているのかもしれない。

今ここにいるのは二人と一頭の馬だけだ。部屋の中ならともかく、野外で服を脱ぐのは恥ずかしいけれど、今日も解呪をしてもらわねばならず、シュタルは下着姿になった。そうして、同じく下着姿で胡座をかいているレッドバーンの膝の上に座る。

レッドバーンはシュタルを抱きしめると、外套で二人の体をくるんだ。厚手の生地でできた外套はとても温かく、これなら風邪をひかないで済む。

解呪の呪文が終わったところで、シュタルはレッドバーンから離れようとしたが、彼はシュタルを抱きしめたまま離さなかった。

「に、兄様っ。離してください」

「いつもなら昼寝している時間だろう？　寝ておけ」

「いつもはベッドじゃないですか。ここは野外ですし、何より兄様の膝の上で寝るなんて、できません」

「俺のことなら気にするな。お前だって、馬に乗ってるだけでも体力を使うだろ？」

「でも……」

シュタルの口答えを許さず、レッドバーンは詠唱を始めた。すると、たちまち眠くなる。どうやら彼は眠りの呪文を唱えたようだ。

「にいさ、ま……」

「おやすみ、シュタル」

シュタルを膝に乗せたままで、足が痛くならないのだろうか？　彼は自分を甘やかしすぎだと思いながら、シュタルは眠りに落ちていった。

そして、三時ちょうどにシュタルは起こされた。のろのろと服を着て、薬草採取を再開する。しばらくして、籠いっぱいに薬草を集めた二人は、馬に乗って帰路へとついた。

その途中、シュタルがふと呟く。

「私も馬に乗れるようになったほうがいいですか？」

「ん？　どうしてだ？」

「二人乗りだと、兄様が疲れませんか？　自分の馬は持てなくても、外出の際に供用の馬を貸してもらえますよね？」

レッドバーンに下賜されたのは軍馬なので、二人と荷物を乗せて走るくらいは問題ない。しかし、騎手である彼は大変ではないのかと気になってしまうのだ。

「俺はお前が馬に乗るのを見ているほうが、落ちないかヒヤヒヤして疲れると思うぞ」

「なっ……」
そこまで運動神経は悪くないはずだと、シュタルはむっとした。
「そもそも、仕事をしながら馬術を覚えるのは大変だ。それより薬草学をやれ、薬草学を。馬に乗る必要があるときには、俺が乗せてやるから」
「うっ、それはそうですけど……。でも、なんでもかんでも兄様に頼むわけにはいきません」
「馬を使う用事なんて、薬草を取りに行くぐらいだろう？　それ以上の遠出なら、おそらく俺もついていくだろうし」
「だけど、巷では遠乗りデートがはやってるって聞きましたよ」
最近、馬に乗ってのデートが人気だと耳にしていたので、シュタルは何気なく口にしてみた。
「デート？　なんだお前、そんな相手がいるのか？」
からかうような口調でレッドバーンが問いかけてくる。
「い、いないですけど……！　でも、はやってるってことは、楽しいってことでしょうし、一度くらいはしてみたいです」
「じゃあ、俺が連れてってやる」

「えっ」
レッドバーンの答えに、一瞬どきりとする。しかし、続けられた言葉に、すぐに落胆することとなった。
「馬に乗れなくてもいいぞ？　俺の馬に一緒に乗せてやるから。そしてデートの最後に薬草をつんで帰ってこよう」
「それはデートじゃなくて、ただの薬草取りじゃないですか」
「一石二鳥だ。ともかく、お前が馬に乗れるようになる必要はない」
ははははとレッドバーンが楽しそうに笑うので、シュタルもつられて笑ってしまう。
「兄様は私を甘やかしすぎじゃないですか？　最近は女性だって、馬に乗りますよ」
「お前は俺の可愛い弟子だから、ついつい甘くなる。……いいんだよ、俺に甘えれば。第一、馬から落ちたら最悪死ぬぞ。馬を御するのはお前が思っているより難しい。そんなこと、お前にやらせたくはない。それとも、お前は俺と一緒に馬に乗るのが嫌か？」
「そ、そんなことはないです……！」
「じゃあ、思う存分、俺に甘えてくれ」
すでに沢山甘えていると思うのに、彼は自分をどれだけ甘やかすつもりなのか。それとも、師匠というのは弟子をここまで甘やかすものなのだろうか？

いずれにせよ、彼に甘やかされるのはとても心地よいし、彼の言うとおり、馬術ではなく薬草学を頑張ろうとシュタルは心に誓った。

◆◆◆◆◆

軍議の準備自体は三ヶ月前から行われるが、直前の一週間が一番忙しい。

シュタルの仕事は師匠であるレッドバーンの補佐が主なものであるが、上層部の集まる会議への参加を許されているわけではない。なので、朝に彼を起こすときと昼の休憩のとき以外は、ほとんど顔をあわせていなかった。

そして、軍議まであと三日に迫った夜だった。

シュタルは一日の仕事を終え、ようやく部屋に戻る。入浴したばかりで濡(ぬ)れている髪をタオルで拭(ふ)きながら、薬草学の本を眺めていた。

「えーと、ここは……」

呟きつつ確認をしていると、一瞬視界が歪(ゆが)む。

「……？」

この時期はいつもより忙しいけれど、昼の休憩時間は確保されているので、きちんと

仮眠をとっているし、無理をしているわけではない。まさか風邪でも引いてしまったのだろうかと思っていたら、急激に体が熱くなった。

「……っ！」

体を流れる血が、燃えるような感覚におちいる。

「なっ……」

毎日レッドバーンに解呪をしてもらっているから、呪いのせいで魔力が乱れるはずはない。それなのに、シュタルの体を流れる魔力が急に不安定になり、体が震えだした。

「なに、これ……」

頭がくらくらして、喉(のど)が渇く。そしてお臍(へそ)の下がじんじんしてきた。体の中心が妙に熱い。

シュタルは助けを求めるため、隣室への扉を開けた。だが、レッドバーンはまだ仕事から戻っていない様子だ。

「兄様……っ」

シュタルは床に膝をつく。その拍子に床に積まれていた本の山を崩してしまうが、元に戻す余裕すらなかった。レッドバーンの部屋に漂(ただよ)う彼の匂いに、さらに頭がくらくらしてくる。

まるで粗相をしたみたいに、足の付け根からじわりと液体が滲み始めた。月のものがきたのかと寝衣の裾をまくり上げて確認したけれど、出血した気配はない。

陰部がじんじんとして、シュタルは内腿を擦りあわせる。自分の体に何が起こっているのか分からず、とても怖かった。

「んうっ……」

思わずもがいたところ、指先が布に触れる。それはレッドバーンの外套だった。何気なくたぐり寄せると、その匂いがふわりと鼻に届いて、ここにはいない彼の存在を強く感じる。

「……っあ」

お腹の奥が疼き、熱を帯びたその場所がひくひくと震えた。

「ど、どうしよう……」

シュタルは外套を抱きしめながら、何度も内腿を擦りあわせた。そうすると幾分疼きがましになる気はするが、体を支配する熱は一向に治まる気配がない。

混乱して顔が熱くなり、涙目になったとき――ガチャリと扉が開けられ、レッドバーンが部屋に入ってきた。

「兄様……！」

「シュタル！　どうした？」

廊下に繋がる扉は別として、シュタルの部屋と繋がっているほうの扉には鍵がかからないので、シュタルがレッドバーンの部屋にいることに、彼は何の疑問も抱かない。

シュタルが涙目でうずくまっているのを見て、レッドバーンは手にしていた書類を投げ出してかけ寄ってきた。

「大丈夫か？　顔が赤いな、熱でも出たか？」

「分からないです……。なんか、体っ、じんじんして……」

「じんじん……？」

こみ上げてくる疼きに、シュタルはまたもじもじと内腿を擦りあわせる。それを見たレッドバーンは、「あ」と声を上げた。

「まさか……いや、まだ早すぎる。しかし、呪いの影響で体内時計が狂ってる可能性も……」

「兄様……？」

何か原因を知っていそうな口ぶりに、シュタルはほっとする。レッドバーンならば、きっとなんとかしてくれるという信頼があった。

「シュタル。お前に今起きているのは、女性の魔導士特有の現象だ。病気でもなんでも

立ち読みサンプルはここまで

ないし、命に関わるものでもないから、とりあえずは安心しろ」
「はい」
やはり、彼はシュタルの身に何が起きているかを把握している。説明を期待して見つめると、レッドバーンは言いづらそうに視線を背けた。
「……で、その現象だが――発情期だ」
「発情期……って、猫とかの……？」
予想もしていなかった答えに、シュタルはぽかんと口を開ける。
「女性の魔導士は二十歳を超えると、定期的に発情するようになる。自分で慰めて快楽を極めれば静まるんだが……お前、自慰をしたことがあるか？」
「なっ……ないです！」
自慰という単語に、シュタルは顔を真っ赤にしてぶんぶんと首を横に振った。単語の意味は知っているけれど、それは男性がするものだと認識していたし、しようと思ったことなど一度もない。
「まあ、そうだよな。しかしこのままでは、いつまでたっても静まらない。対策をとらないと魔力も乱れて、そのうち精神がおかしくなる」
「そんな……」

「……俺がなんとかしてやろうか？」
レッドバーンは少し頬を染めながら、しかし真剣な表情でシュタルを見つめてきた。
「兄様……」
「知識としてこの現象を知ってはいるが、さすがに発情している女魔導士を慰めた経験はない。上手くできるか分からないが、まあ、お前が自分でやるよりはマシだろう。俺はお前より長く生きているぶん、多少は色事の知識がある」
レッドバーンは手を伸ばし、シュタルの背中を優しく撫でた。
「お前を放ってはおけない。恥ずかしいかもしれないが、俺に任せてくれないか？」
「……っ」
確かに恥ずかしいけれど、シュタルは自分を慰める術など知らないし、そもそも体が疼いて指先すらまともに動かせない。
シュタルは意を決して、こくりと頷いた。
「よし、いい子だ。とりあえず、ベッドの上に運ぶぞ」
レッドバーンはシュタルの体をひょいと抱き上げ、ベッドの上に横たえる。
「目隠しをしながらやるわけにはいかないから、お前の体を見ることになる。これは、解呪と同じように必要な処置だから、我慢してくれ」